

ミラノリブ

笹口晴美社長(44)

鮮やかな色彩と優れたデザインが上質の絹の輝きをさらに際立たせる。県産絹にこだわり、商品の企画から製造、販売を手掛ける。

桐生市生まれ、幼いころから機音を聞いて育った。結婚し、夫の家業であるニットメーカーの仕事に携わったが、当時流通していたニットは99%が外国製。残り1%を国内で分け合う現状に、今後のメーカーは企画、販売も自で行うべきだと思い、消費者に近いところでのづくりをしようとした。小さな声も形にしようと、オー

・伝統技術に新しい手法
・蚕が最高のデザイナー
キーワード

2006年にミラノリブが仕入れた繭計4500kg。同社良質な絹を確保するため、契約結んだ前橋市の蚕農家3軒かそのうち1000kg仕入れる。買付けは蚕や桑に勢がある春繭に限、将来は契約農の数を増やし、すべての繭を契約家で賄う計画だいう。

独創
強歩

ミラノリブ 1998年、笹口社長が旧大間々町に創業。2005年11月、自社ブランド「CHIJIILA」を設立し、桐生市本町に工場と事務所を移転。従業員12人。

群馬の絹 再び海外へ

染織をすべて県内でまかなえるのは群馬の特徴。伝統技術に新しい手法を取り入れて発展させない途絶え

00一年に県の二社二技術に選定された。和装の場合は縦糸と横糸を組み合わせて織るが、ニ

試験場のもとでテストを繰り返した。一本の糸を作るために数十個の繭を必要とする。さまざまな思いが結

作って余らせることはしない。これから手掛けたいこ

へ進出したように、群馬の絹の躍進を再現できる



座繰り糸を引く作業所は昔の機屋。「絹の良さを伝えるものづくりをしたい」と話す笹口社長(中央)

繭に染色 用途広がる

「群馬の繭でなかったら、ここまで熱くならなかった」と語る笹口社長。05年には「トレーサビリティ(商品履歴)」を確立し、流通経路を追跡できるシステムを導入した。養蚕農家とメーカー、消費者をつなぎ、養蚕振興につなげたい考えだ。

また、同社に勤務する上州座繰りの伝統技術保持者、千明敏彦さん(49)の研究で絹を繭の状態で染色する新技術を開発、特許出願を済ませた。座繰りの手法で繰り糸された絹は、複数の色の繭の組み合わせによって無限の色が生み出せるようになり、用途が広がったという。こうしたノウハウを結集し、自社ブランド

「CHIJIILA(ちぢら)」を設立。特に座繰り糸の商品は通信販売「三越カタログ」で最上位の「特選」に位置している。

また、千明さんが中心になって州座繰りの講習会も実施し、後の育成に努めている。講習で引いた座繰り糸を使い、スカーフなどを編み上げるサービスも検討しているという。

(報道部 前原久美代)

ささぐち・はるみ 1963年桐生市生まれ。旧大間々町のニットメーカーに嫁いだことをきっかけに、絹糸の魅力を引き出す製品づくりに関心を持つ。デザインや色彩を学び、98年に独立創業。みどり市在住。

リブ ク CHIJIILA(ちぢら) ミラノリブの自社ブランド名。蚕が繭をつくる時、頭を八の字にくねらせながら糸をはくため、繭を解きほぐした糸には自然なちぢれができる。絹糸の世界では、このちぢれを「ちぢら」と呼ぶ。「絹の本質にこだわり、大切に作る」という気持ちをこめて名付けられた。

2007.4.16

口糸新聞